

八王子古宮式と近江湖南型甕

● 矢作健二 ・ 赤塚次郎

一宮市八王子遺跡出土土器を基本として、弥生後期前葉の土器様式を「八王子古宮式」として設定した経緯がある。八王子古宮式とは、近江湖南様式を中心として成立した土器様式を主体とするものである。ここでは八王子古宮式期の湖南型甕の胎土分析結果を報告し、その成果を基にした考古学的な評価を考えてみたい。胎土分析は、滋賀県守山市域の代表的な遺跡出土の湖南型甕との比較を通じて実施し、結果として一宮市八王子遺跡出土の湖南型甕には、「野洲川流域」と「中南伊勢地域」と大きく2つのまとまりが存在する可能性が指摘できた。伊勢湾沿岸部における弥生後期前葉の地域社会の変貌を考える時に、野洲川流域からの直接的な土器の搬入を前提とした議論が必要であり、それはより広域的な社会変動を予見させる動きと考えたい。

はじめに

一宮市八王子遺跡の調査報告書の作成段階で、不思議な土器群と遭遇することとなった。それは「字古宮」地区周辺の弥生時代後期と思われる遺構の所属を整理している時である。コンテナの中から出てきたのは、近江地域に存在する土器とよく似た近江型甕の口縁部の破片であった。竪穴住居内出土の遺物をいくつか確認して行く中で、あまりにも近江型甕の破片が多いのに違和感を覚えながらも、山中式をイメージさせる甕の抽出に時間を割いていたのである。また小型の盤状高杯が多く存在しているのにも、やや不思議な気持ちを抱き始めていた。そのような中で、八王子遺跡D区SB48の整理作業を開始した瞬間から、ひょっとするとこうした近江系を主体とする土器様式が存在するのではないかと考え始めた。弥生時代後期に現れる重要な器種である、器台やワイングラス型高杯はいったいどこから濃尾平野にやってきたのであろうか。これらは東海オリジナルな土器型式なのであろうか。その手がかりを、あらたに設定した弥生時代後期前葉の土器様式の中に求めることにしたい。結果的に器台は近江湖南地域に、そして山中式の登場とともに出現するワイングラス型高杯は、北近畿地域にその淵源を考えて行くこと

ができるものと考えている。

ここではかつて大参義一が「仮称見晴台式」と称して、高蔵式と山中式の間に一様式の存在を想定し、石黒立人が朝日遺跡の資料を使って抽出を試みようとした、山中式でもなく、高蔵式には所属しない土器様式の実態を整理し、その糸口が「近江湖南型」である点を、科学分析を通じて明らかにしてみたい。

1 八王子古宮式（はちおうじふるみやしき）

一宮市八王子遺跡の古宮地区周辺の遺構群を標識として、八王子遺跡調査報告書において「八王子古宮式」を設定した。詳細は報告書に譲り、まずはその概要を整理しておきたい。八王子古宮式は山中式に先行する濃尾平野低地部（中島郡）での弥生時代後期前葉の土器様式であり、基本器種は盤状高杯の大小、近江湖南型平底甕と古宮型平底甕に代表され、加えて山中型台付甕の素形と思われる古宮型台付甕や加飾広口壺、湖南型鉢などが共伴する。総じて「近江湖南」地域の土器型式群が大きく影響していることは明らかである。つまり近江湖南系土器の参入によって新たな土器様式が生み出されて行ったと考えられる。八王子古宮式とは、近江湖南型を基本としたあらたな土器様式であり、まさに濃尾

パリオ・サーヴェイ株式会社・分析センター 岩石鉱物グループ グループリーダー

大参義一 1980「弥生式土器・土師器」『館蔵品図録』名古屋市見晴台考古資料館

石黒立人 1987「高蔵式から山中式へ（予察）」『第3回東海埋蔵文化財研究会 欠山式とその前後』研究報告編

赤塚次郎 2002「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集

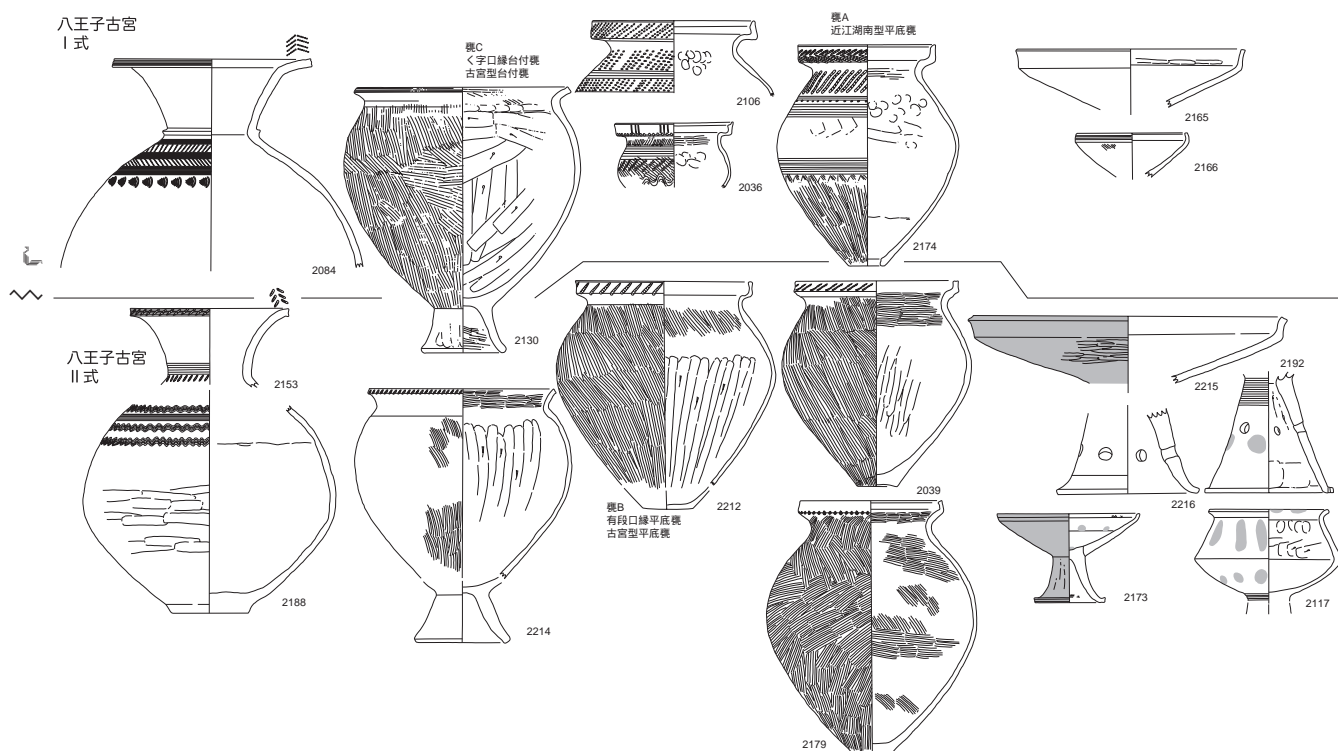


図1 八王子古宮式編年略図

平野の弥生時代後期の扉を開けた画期的な土器群と評価したい。そこで、ここでは八王子古宮式を象徴する「近江湖南型」甕に焦点を絞って以下、話を進めて行くことにする。なお後述するように、科学的な胎土分析によって近江湖南型甕の直接的な搬入がある程度予見できる結果を得ている。小稿では近江型甕として多用されている「受口口縁甕」の総称を避け、より型式的な視点を限定的に扱い、近江湖南型甕(野洲型甕)として記述していくことにしたい。

なお八王子古宮式を 式と 式に大別した。

式は近江湖南型の土器様式が色濃く見られる段階であり、式はむしろ近江色から脱却し、固有の土器様式を模索し始める過渡期的な段階と位置づけられる。現状において 式期の良好な遺物群は八王子遺跡において他に認められない。したがって後続する山中 式前半期との関係は依然として不明瞭のままである。今後の課題として資料の増加をまって再検討する必要がある。

2 伊勢湾沿岸部における近江湖南型甕の分布

朝日遺跡調査報告書の中にも、搬入品として

近江湖南型甕が報告されている。伊勢湾沿岸部の弥生時代後期の集落遺跡においても、同様に搬入土器の範疇でこれらの土器が処理・評価されてきた傾向が強いものと思われる。そこで伊勢湾沿岸地域での近江湖南型甕の分布と、その所属時期をまずは概観しておきたい。取り扱う資料は伴野幸一編年近江弥生 期古段階とされている、守山市服部遺跡 SD201 資料を中心とした近江湖南型甕にほぼ限定したい。

尾張地域では、一宮市八王子遺跡と同じく山中遺跡、岩倉市岩倉城下層、西春日井郡清洲町朝日遺跡などで報告されている。美濃地域では大垣市荒尾南遺跡で比較的まとまった出土が見られ、その他では今宿遺跡でも確認できる。伊勢地域では津市六大 A 遺跡の河道から比較的まとまった数の近江湖南型甕が散見できる。

搬入品という枠を取り払うことによって、今後の資料の増加が期待できよう。

3 胎土分析

上記のような近江湖南型甕を、次に科学的な分析を通じて整理することにしたい。

試料は、八王子遺跡から出土した甕の破片 17 点と比較対照試料として滋賀県守山市所在の服部遺跡から出土した同時期とされる甕の破片 12 点、二ノ畦遺跡から出土した同様の試料 2 点、二ノ畦横枕遺跡から出土した同様の試料 1 点、伊勢遺跡から出土した同様の試料 1 点の合計 33 点である。

八王子遺跡の試料は、湖南型とされた八王子

古宮 式～ 式期に所属するものである。各試料には試料番号が付されているが、連番ではない。各試料についての記載は、分析結果を呈示した図2に併記する。また、湖南地域遺跡出土試料については、図3に併記する。これらの試料に付いている試料番号も連番ではない。

これまでパリノ・サーヴェイ社では、胎土に含まれる細砂径の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴

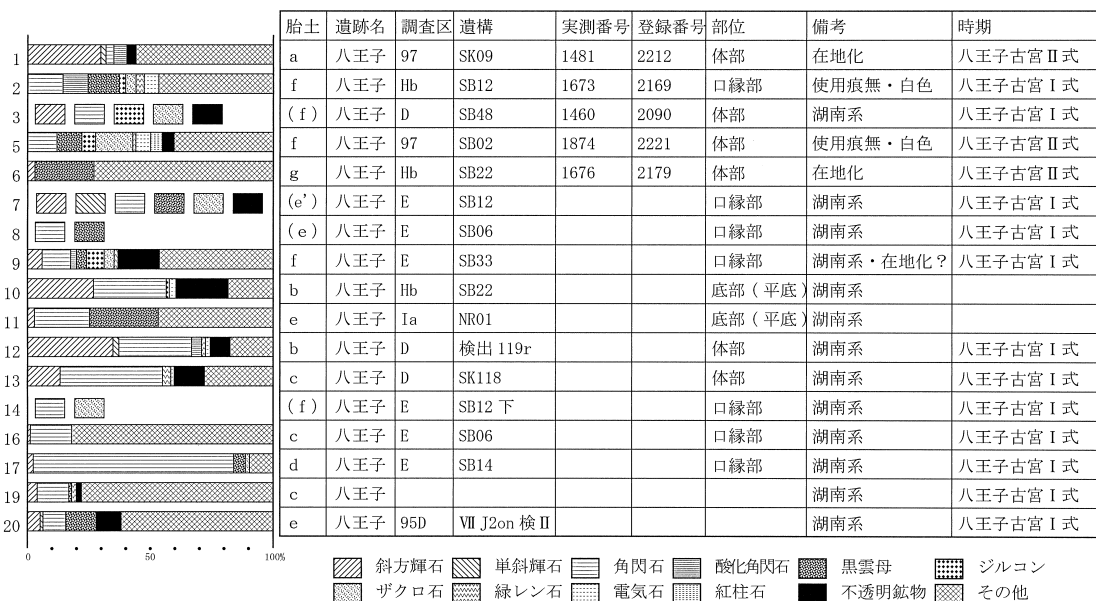


図2 八王子遺跡出土試料の胎土重鉱物組成



図3 湖南地域遺跡出土試料の胎土重鉱物組成

とする方法を多く用いてきた。これらの結果との比較参照も考慮して、本分析でもこの方法を用いる。さらにここでは、重鉍物分析の結果から、適宜試料を選択し、それらの土器片の薄片を作製し、その岩石学的手法による観察を行う。観察により、重鉍物以外の胎土の特徴(特に岩石片の種類など)を捉え、重鉍物組成による比較を検証した。各処理方法は以下の通りである。

a) 重鉍物分析

土器片をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4 mm - 1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96)により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉍物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉍物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに、多いと判断される鉍物を呈示するにとどめる。

b) 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は岩石学的手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉍物片および岩石片の種類構成を明らかにし、また胎土の基質については、孔隙の分布する程度と砂の配列や孔隙などに方向性が認められるかどうか、および基質を構成する粘土が焼成によりどの程度ガラス化してどの程度粘土鉍物として残存しているかということと酸化鉄などの鉄分の含まれる程度について定性的に記載した。

4 胎土分析結果

八王子遺跡出土試料の分析結果を表1、図2に示し、湖南地域遺跡出土試料の分析結果を表2、図3に示す。八王子遺跡出土試料17点の試料のうち、同定粒数100個未満のものは4点あり、湖南地域遺跡出土試料では半数の8点ある。これらの試料の分量(重さ)は、いずれも少なく、数

g程度のものがほとんどであった。したがって、今回の分析における同定粒数100個未満の試料の胎土は、特性として重鉍物の含量が少ないのか、あるいは処理可能量が少なかったために重鉍物が得られなかったのか、いずれであるかは現時点では判断することはできない。ここでは同定粒数100個未満の試料の重鉍物組成をグラフにはしないが、その組成の傾向から後述する胎土の分類も行った。ただし、100個以上同定できた試料よりも分類の確実性に欠けるという意味で括弧を付けた(図2、3)。

今回の分析結果を概観すると、八王子遺跡と湖南地域遺跡ともに、斜方輝石と角閃石を主体とする組成や角閃石と黒雲母を主体とする組成が認められ、さらにジルコン、ザクロ石、緑レン石、不透明鉍物などの鉍物を少量伴い重鉍物組成を構成している。ここでは、これらの鉍物の量比関係から、今回の試料の胎土について以下のような分類を行った。

a類:斜方輝石が多く、他に少量の単斜輝石、角閃石、不透明鉍物を伴う。

b類:斜方輝石と角閃石がほぼ同量程度に多い組成であり、これに少量の不透明鉍物を伴う。なお、二ノ畦横枕遺跡の試料Aは、b類の組成に少量のザクロ石が加わっているが、後述するように薄片観察ではb類の試料とほぼ同様の様相を呈したことから、b'とする。

c類:角閃石が多く、中～少量の斜方輝石と少量の不透明鉍物および少～微量の黒雲母および緑レン石を伴う。

d類:角閃石が多く、少量の黒雲母と微量の斜方輝石を伴う。

e類:黒雲母が最も多く、これに中～少量の角閃石と少量の斜方輝石を伴う。なお、二ノ畦遺跡出土試料12は、同定粒数100個未満であるが、黒雲母のやや多い傾向からe類に分類される可能性があるが、ザクロ石が少量加わっていることから、e'類とする。

f類:「その他」とした変質粒が多いため、卓越して多い鉍物はないが、角閃石が若干多く、これに黒雲母、ジルコン、ザクロ石、電気石などを伴う。

g類:「その他」とした変質粒が多いが、それを除くと黒雲母が多く、微量の斜方輝石とジル

表 1 八王子遺跡出土試料胎土重鉍物分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	不透明鉍物	その他	合計
1	1	56	4	6	10	0	2	0	1	0	0	7	101	188
2	0	2	0	17	12	15	3	5	4	7	0	0	53	118
3	0	6	0	8	1	0	7	12	0	2	0	36	21	93
5	0	2	1	30	2	25	14	38	3	15	12	12	96	250
6	0	3	0	1	0	24	2	2	0	1	2	2	63	100
7	0	5	5	5	2	9	0	4	0	0	0	6	60	96
8	0	0	0	17	0	9	0	1	0	0	0	1	36	64
9	0	15	2	29	6	10	18	10	4	2	2	42	110	250
10	0	67	1	74	0	1	3	1	1	7	2	53	40	250
11	0	7	0	56	1	70	0	1	1	1	0	0	113	250
12	0	87	6	74	10	1	0	2	4	5	0	20	41	250
13	0	28	0	88	0	0	2	0	7	3	1	26	56	211
14	0	1	0	37	0	0	0	5	0	1	1	2	29	76
16	0	3	0	42	2	0	0	0	1	0	0	0	202	250
17	0	6	0	204	0	12	0	4	0	2	0	1	21	250
19	0	10	1	32	0	3	1	1	5	0	1	5	191	250
20	0	13	3	23	0	31	1	1	0	0	1	25	152	250

表 2 湖南地域遺跡出土試料胎土重鉍物分析結果

試料番号	遺跡名	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	不透明鉍物	その他	合計
1	服部	54	0	131	0	5	2	0	0	0	1	25	32	250
2	服部	40	0	41	0	0	0	2	0	0	1	2	8	94
3	服部	3	0	15	0	4	1	1	2	0	0	13	19	58
4	服部	3	0	24	1	2	1	0	18	3	9	10	35	106
5	服部	28	0	63	0	5	0	0	4	2	4	15	22	143
6	服部	4	0	32	0	19	0	0	2	1	2	2	19	81
8	服部	5	2	43	2	3	1	3	16	4	2	15	27	123
31	服部	3	0	33	0	10	0	4	9	0	0	6	7	72
D	服部	1	0	12	0	19	0	3	4	0	0	0	211	250
E	服部	27	0	27	4	1	0	3	0	0	0	4	6	72
F	服部	58	0	71	0	0	0	0	0	0	0	10	3	142
G	服部	3	0	3	1	0	2	0	4	2	1	11	51	78
11	二ノ畦	8	3	3	5	26	0	0	0	0	0	0	63	108
12	二ノ畦	4	4	5	0	20	0	9	4	0	1	10	15	72
A	二ノ畔横枕	7	3	11	0	1	0	11	0	1	0	15	51	100
28	伊勢（18次）	1	0	7	0	41	0	0	1	0	1	2	22	75

表 3 胎土薄片観察結果

試料番号	遺跡名	胎土分類	砂粒			砂粒の種類構成																孔隙度	方向性	粘土残存量	含鉄量	備考
			全体量	淘汰度	最大径	鉱物片								岩石片												
						石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	黒雲母	角閃石	緑廉石	不透明鉱物		頁岩	砂岩	凝灰岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩					
10	八王子	b		×	0.8	+	+				+	+	+				+	+	+	+	+				+	砂粒は中粒砂～粗粒砂が主体。火山ガラスはバブル型。
8	服部	c		×	1.2	+	+				+	+		+							+	+			+	砂粒は中粒砂～粗粒砂が主体。試料表面（褐色）と内部（黒褐色）で素地の色調が異なる。火山ガラスはバブル型。
F	服部	b		×	1.9	+	+	+	+		+					+					+	+			+	砂粒は中粒砂～粗粒砂が主体。試料表面（淡褐色）と内部（褐色）で素地の色調が異なる。火山ガラスはバブル型。
31	服部	(c)		×	1.7	+	+				+	+		+	+			+			+	+			+	砂粒は中粒砂～粗粒砂が主体。試料表面（褐色）と内部（黒褐色）で素地の色調が異なる。火山ガラスはバブル型。
A	二ノ畦横枕	b'		×	1.3	+	+				+		+	+		+	+	+	+	+	+	+		×	+	砂粒は中粒砂～粗粒砂が主体。試料表面（淡褐色）と内部（褐色）で素地の色調が異なる。多結晶石英は花崗岩由来。

注 量比 : 多量 : 中量 : 少量 + : 微量
程度 : 強い : 中程度 : 弱い × : なし

コン、ザクロ石などを伴う。

以上の分類を各試料について当てはめた結果を図2および図3に示す。八王子遺跡の試料には、a～g類までの全ての胎土が混在するが、湖南地域遺跡の試料では、服部遺跡ではb類とc類のみ、二ノ畦遺跡ではe類とe'類、二ノ畔横枕遺跡はb'類、伊勢遺跡はe類である。

2) 薄片作製観察

選択した試料は、八王子遺跡と湖南地域遺跡の試料に共通して認められた胎土分類であるb類とc類のものを対象とした。そのうちb類については、b類の典型的な組成である八王子遺跡の試料12、服部遺跡の試料F、b'類とした二ノ畦横枕遺跡の試料Aの3点を選択し、c類については、緑レン石の多い服部遺跡の試料8と同定粒数100個未満の服部遺跡試料31の2点を選択した。

観察結果を表3に示す。5点の試料間では、砂粒の種類構成が大きく異なる試料はなく、いずれも中粒～粗粒砂を主体とした砂粒を中量程度含み、その粒径の淘汰度は不良である。鉱物片では、いずれの試料も石英がやや多く、他にカリ長石、斜長石、不透明鉱物を微量含む。また、服部遺跡試料8と31および二ノ畦横枕遺跡試料Aには微量の黒雲母が認められ、二ノ畦横枕遺跡試料Aを除く4点の試料には微量の角閃石が認められる。岩石片では、いずれの試料にも微量または少量の花崗岩と火山ガラスが認められる。火山ガラスは、扁平板状のバブル型と呼ばれる形態を主体とする。また、服部遺跡試料F以外の4点には少量または微量のチャートが認められ、八王子遺跡試料10と服部遺跡試料F以外の3点には頁岩も認められる。さらに、服部遺跡試料8とF以外の3点にはホルンフェルスも認められる。

5 胎土分析結果からの考察

1) 湖南地域遺跡出土試料の胎土について

守山市所在の各遺跡からの搬入を考える前提として、野洲川流域の地質学的背景を把握する必要がある。日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)などにより、野洲川流域の堆積物に含まれる重鉱物の主な給源となる地質は、鈴鹿山

脈の鈴鹿花崗岩や信楽地域に分布する田上花崗岩および信楽花崗岩である。鈴鹿花崗岩は主に粗粒～中粒の黒雲母花崗岩であり、主成分鉱物の中の有色鉱物は黒雲母と角閃石である(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 1990)。また、田上花崗岩は主に中～粗粒および細～中粒黒雲母花崗岩からなり(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 2000)。信楽花崗岩は粗粒黒雲母花崗岩と含角閃石黒雲母花崗閃緑岩により構成されている(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 1982)。したがって、それらに由来する碎屑物の重鉱物組成としては、黒雲母および角閃石が主体になることが推定される。今回の湖南地域遺跡試料で認められた胎土の重鉱物組成であるb、c、eの各類において角閃石と黒雲母が比較的多く含まれることは、この地質学的背景と調和的である。

一方、これら3類において角閃石および黒雲母と並ぶ主な重鉱物である斜方輝石については、上述した花崗岩類には全く含まれていない。緒方(1959)には、滋賀県青土付近に含輝石花崗閃緑岩が分布するとあるが、規模は鈴鹿花崗岩に比べると遙かに小さく、また輝石はほとんど変質しているとあることから、今回の湖南地域遺跡出土試料に認められた斜方輝石の由来とはならない。ここで、花崗岩からなる山地と琵琶湖岸の低地との間に分布する丘陵と段丘に目を向けてみる。これらの丘陵や段丘を構成している地層は、古琵琶湖層群と呼ばれる新第三紀鮮新世から第四紀更新世にいたる湖成層および河成層である。これらの堆積層自体は重鉱物の給源とはならないが、これらの堆積層中に多数狭在する火山灰層は重鉱物を多く含んでいる。古琵琶湖層群中の火山灰層は、市原ほか(1988)により大阪層群中の火山灰と対比されている。これにしたがって、大阪層群中の火山灰の記載を吉川(1976)により確認すると、斜方輝石を多く含む火山灰が複数認められる。したがって、丘陵や段丘縁辺に分布するような、これらの火山灰を狭在する堆積層に由来する碎屑物は、斜方輝石を比較的多く含む可能性がある。したがって、斜方輝石、角閃石、黒雲母を含むb、c、eの各類は、野洲川流域の地質学的背景とは矛盾しない。

薄片観察で認められた服部遺跡出土試料のb

類とc類に含まれる岩石片の種類構成でも、花崗岩が比較的多く、火山灰層に由来するパブル型火山ガラスを伴うなど、上記の野洲川流域の地質学的背景と一致する。さらに、服部遺跡の試料8と31に含まれるチャートと頁岩は、石田ほか(1980)に記載された丹波帯の分布を反映していると考えられる。丹波帯は鈴鹿山脈の主体を構成する地質であり、チャートや砂岩、頁岩などから構成されている。記載によれば、栗東町に広がる瀬田丘陵の東部や野洲川右岸に位置する妙光寺山および三上山に丹波帯からなる地質がブロック状に分布していることが確認できる。なお、服部遺跡試料31に認められるホルンフェルスは、丹波帯に貫入した花崗岩体の周縁に形成された変成岩に由来する可能性がある。以上のことから、湖南地域遺跡から出土した試料のう

ち、b、c、eの各類に分類される試料は、いずれも野洲川流域という範囲での在地の土器であると考えられる。

b'類とした二ノ畦横枕遺跡試料Aについては、薄片観察による鉱物片や岩石片の種類構成は、服部遺跡のc類とした試料8や31とほとんど変わらない。この結果のみをみれば、二ノ畦横枕遺跡試料Aも遺跡の所在する野洲川流域の地質学的背景と調和するといえるのであるが、'を付けた理由であるザクロ石の存在を、上述した野洲川流域の背後に分布する各地質の記載からは認めることができない。一般的には、ザクロ石は酸性火成岩の花崗岩や流紋岩または変成岩の片麻岩などに多く含まれることが多いが、上述した野洲川流域に分布する各花崗岩体の記載にはザクロ石は認められない。したがって、現時点

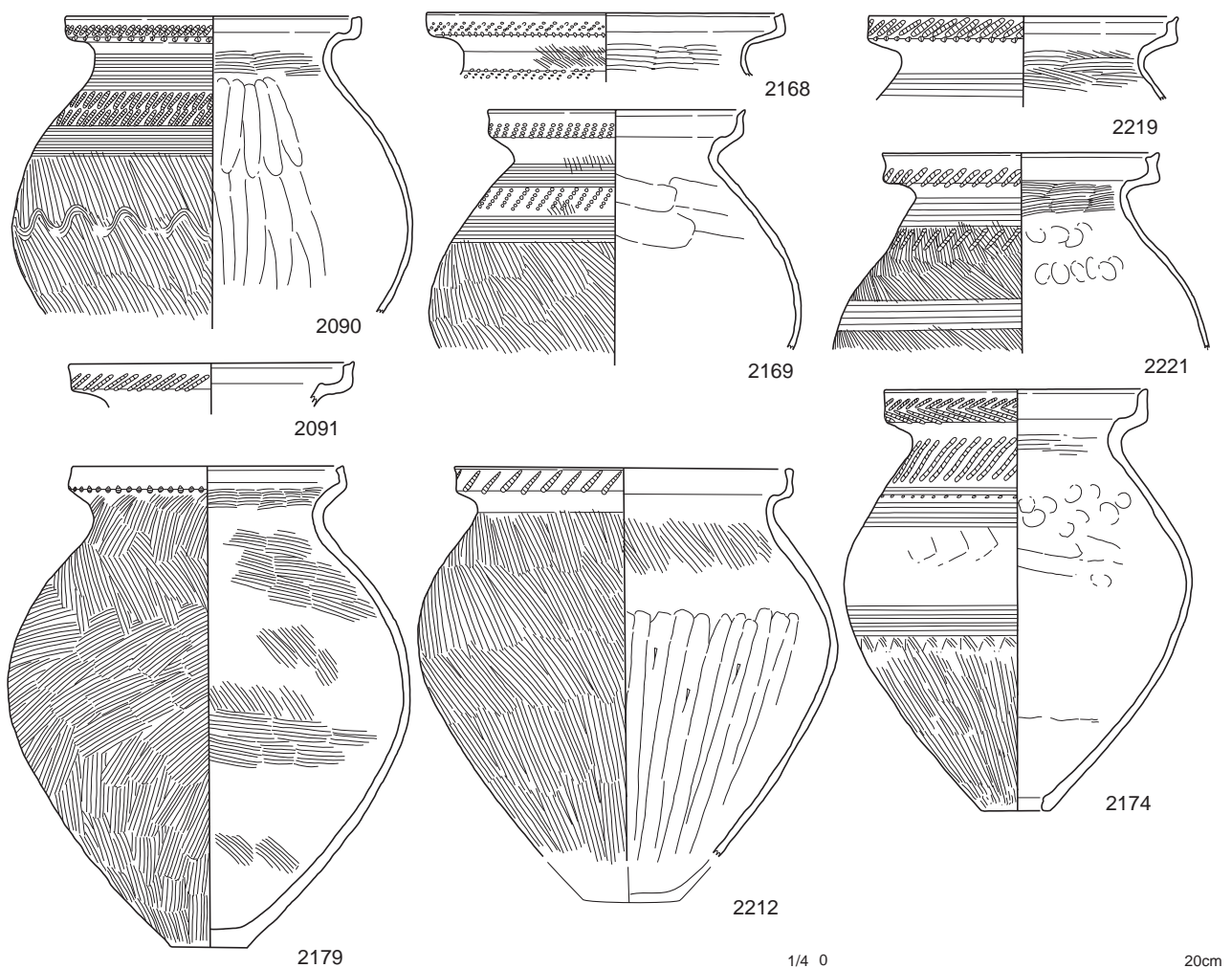


図4 八王子遺跡出土湖南型と古宮型平底甕 (S=1:4)

ではb'類の胎土が野洲川流域の地質に由来する可能性は低い。すなわち、二ノ畦横枕遺跡試料Aは野洲川流域外からの搬入品である可能性もある。このことは、同様にザクロ石を比較的多く含むe'類に分類される二ノ畦試料12についても同様である。現時点では、ともにその地域性は特定できない。

なお、今回の試料では、服部遺跡出土試料12点のうち9点がc類であり、残り3点はb類である。一方、二ノ畦遺跡出土試料の2点はe類とe'類、二ノ畦横枕遺跡出土試料はb'類、そして伊勢遺跡出土試料はe類という構成であり、服部遺跡で認められたb類およびc類は1点も認められない。このような各遺跡出土試料の胎土の違いは、野洲川下流域における土器製作事情が場所により異なっていたことを示唆するのかもしれない。

2) 八王子遺跡出土試料の胎土について

これまでに当社で行ってきた愛知県内遺跡出土土器胎土および伊勢湾岸の河川砂の分析例から、八王子遺跡の位置する尾張低地では、斜方輝石と角閃石を主体とする（両者間では斜方輝石の方が若干多い）重鉱物組成を示す胎土の土器は在地性が高いとしてきた。今回の分析結果でいえば、a類とb類がそれに相当する。これらの胎土のうち、a類は、発掘調査所見によって在地化した土器とされている試料番号1に認められていることから、在地すなわち尾張低地産を示唆する可能性は高い。

一方、b類については、上述のように守山市所在の服部遺跡出土試料のb類を、遺跡の所在する野洲川流域産であると考えた。ここで、b類とした八王子遺跡出土試料10の岩石片の種類構成をみると、同じb類とした服部遺跡試料Fとは花崗岩や火山ガラスの産状で一致するが、チャートの産状では異なる。しかし、b類と同様に野洲川流域産を示すとしたc類の服部遺跡試料の岩石片の産状とはチャートやホルンフェルスの産状まで一致する。これらのことから、八王子遺跡出土試料の中でb類とした試料は、その考古学上の所見も考慮すれば、野洲川流域からの搬入品である可能性がある。

c類以下の胎土については、これまでの分析例および尾張低地の地質学的背景から、尾張低

地で作られた可能性は低い。これらのうち、c類とe類については、上述のように湖南地域遺跡出土試料に認められることから、b類と同様に野洲川流域からの搬入の可能性はある。

また、d類の組成は、伊勢湾岸に流れ込む河川砂の分析例（矢作ほか，1997）などから、伊勢平野中～南部の碎屑物に由来する可能性がある。すなわち、八王子遺跡出土試料17は、同地域で作られた可能性がある。

f類の組成は、これまでの分析例により、西三河地域または伊勢平野中～南部地域のいずれかの地域産を示唆する可能性が高いとしてきた組成である。今回の八王子遺跡出土試料は、野洲川流域との関係が考えられていることから、f類の示唆する地域は、西三河地域よりも伊勢平野中～南部地域である可能性が高い。なお、f類とした試料のうち、八王子遺跡出土試料2と5はいずれも「使用痕無・白色」という所見がある。また、所見にて在地化の要素もあるとされている八王子遺跡出土試料9は、尾張低地を特徴づける鉱物である斜方輝石の含有量が若干高い。これらは、所見と胎土との一致として指摘しておきたい。

g類は、グラフには表されない微量の鉱物の種類をみるとf類とほぼ共通することから、胎土の由来はf類と近似すると考えてよい。すなわち、その示唆する地域は、伊勢平野中～南部地域である可能性がある。

3) まとめ

1: 八王子遺跡出土試料の胎土はa～g類まで分類された。

2: 守山市所在の遺跡出土試料では、服部遺跡出土試料はb類とc類、二ノ畦遺跡はe類とe'類、二ノ畦横枕遺跡はb'類、伊勢遺跡はe類の各類に分類された。

3: 八王子遺跡出土試料のa類は在地である。

4: 八王子遺跡出土試料のb、c、eの各類は野洲川流域からの搬入の可能性はある。

5: 八王子遺跡出土試料のd、f、gの各類は伊勢平野中～南部地域からの搬入の可能性はある。

6: 守山市所在の遺跡試料のうち、b'類とe'類の胎土は野洲川流域外からの搬入の可能性はある。



図5 湖南型甕の搬入経路

現時点では、各遺跡とも試料数も少なく、また重鉍物組成が明瞭に得られなかった試料もあったことから、上記の結果はまだ可能性の域を出ないが、今後の分析例の蓄積と、重鉍物分析以外の手法によるデータ作成なども含めて、検証を進めていく必要がある。

6 八王子古宮式を巡る基礎的な問題

以上の分析結果を基に、若干の考古学的な評価を加えてみたい。一宮市八王子遺跡出土の八王子古宮式を象徴する近江湖南型甕の主体は、胎土分析的にも濃尾平野産ではないことが明らかになったものと思われる。形態的には一宮市八王子遺跡の八王子古宮式期の土器の主体が、野洲川下流域のものに極めて類似しているのであり、分析結果からも彼の地からの直接的な搬

入も想定できる。また加えて「中～南伊勢地域」の資料も存在する可能性がでてきたが、そこには幾つかの問題点も浮き上がってきた。さらにその他には、形態的な特徴からは湖東地域や濃尾平野で受容、改変された土器が含まれていることも想定できる。

さて、胎土分析からは「野洲川下流域」と「中～南伊勢地域」に大きく2分できるような結果が得られた。これを分類と編年上の観点から整理すると、以下のようにまとめられる。まず一宮八王子遺跡出土の甕Aとした近江湖南型平底甕には、大きく「野洲川流域」と「中～南伊勢地域」と想定された胎土分類上の二者が存在する。甕Bとした古宮型平底甕は在地系の濃尾産あるいは一部が中～南伊勢地域産の可能性もある。八王子古宮式期に所属する資料は、分析試料から見ると「野洲川流域」よりも「中～南伊勢」とさ

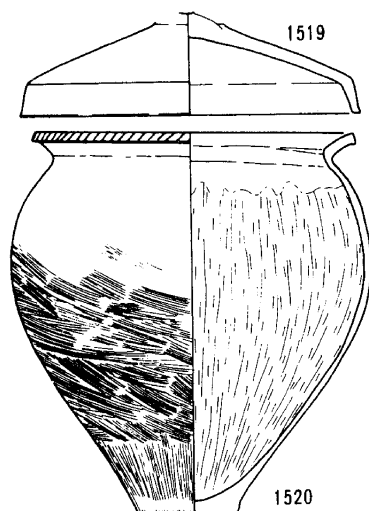


図6 朝日遺跡土器棺

れたものが多いようにも見受けられる。しかし現状の考古学データを概観すると、中・南伊勢に湖南型を創設し、主体的に様式として定着させた地域は認めがたい。現状の考古学成果とはうまく整合性をもたないようである。したがって「d、f、gの各類は伊勢平野中～南部地域」とされた一群の資料については、さらなる科学的な調査の継続が必要であり、ここでは八王子古宮式の成立には、どうやら2つの小地域が関与していた可能性が高い点を留意することに留めておきたい。

次に八王子古宮式期に野洲川からいつどのような経路で、濃尾平野に至るのかという問題を考えてみたい。前述した湖南型甕分布や胎土分析結果などを総合すると、野洲川流域から鈴鹿を経て濃尾平野へという経路がまず想定できる。最も短距離でかつ地理的歴史的な標準経路「表街道」と思われる。津市六大A遺跡からの八王子古宮式併行期の土器の出土が、この点を物語っているとも考えられる。一方で湖東から不破関を通過して西濃へ、という経路も興味深い。一部に湖東や坂田郡周辺の土器に類似する資料も八王子遺跡には散見できるからである。しかしながら、現状の分析結果と考古学的な視点に立てば、八王子古宮成立期においては、おそらく前者が「湖南型」拡散の主経路として最も重視すべきルートと思われる。現在の国道1号線が走る、鈴鹿峠越えルートである。

次に参入の時期であるが、野洲川流域の土器編年に基づけば、伴野編年近江 期古段階を中心にすることは明瞭であり、一部に 期新段階に遡る可能性が高いものも含まれる。おおむね守山市服部遺跡 SD201 出土品を中心とする時期と考えて大過ない。

伊勢湾沿岸部への湖南型の参入が、弥生時代後期前葉にあり、その分布範囲の核は、図5から明らかなように中勢から濃尾平野低地部（尾張海部・中島郡、美濃安八郡）にあるようだ。現状では西三河地域の川原上層 式期にはこうした傾向は読み取ることとはできない。したがって矢作川流域までの拡散は認められないようである。

ところで、八王子古宮様式として定着した場所は、現状では中島郡南部に限定できる。その周辺地域での状況は未だ不透明でもある。八王子古宮 式期は現状では八王子遺跡以外まとまった出土例が見られない。ただ単体や僅かな手がかりは存在する。例えば、朝日遺跡 3J20 地区出土の土器棺（図6）である。蓋として使用されていたのは盤状高杯の杯部であり、端部のナデ調整でミガキ痕跡が見られない。また棺に転用されていた甕は平底のハケ甕であり、口縁部端部には刺突文が施され、内面の調整は明瞭なタテ方向のケズリである。こうした特徴は従来の編年観では所属が難しいものであったが、八王子古宮 式期の資料としてあらためて評価できるものである。したがって後続する山中 式の前段階と八王子古宮 式が併存する土器様式という可能性も残るものの、おおむね変遷の方向性は提示できてものと考えている。一方で八王子古宮式期という新たな土器様式の設定によって、環境変動の可能性が考えられるようになってきた。すなわち八王子遺跡や朝日遺跡の谷地形の観察結果からは、洪水が多発する環境変動期であった可能性が想定できるようだ。遺跡の断絶が小様式単位で起こっていたとすれば大変興味深いことになる。八王子遺跡では明らかに八王子古宮式と山中式との間に断絶が想定できる。今後の調査成果に期待し、あらためて言及したい。

最後に、ここで見晴台式との関係性に言及しておく必要がある。近年の村木誠による「仮称見

晴台式」の研究成果によると、見晴台式が愛智郡を中心とした固有の土器様式であり、かつ西三河地域との関係が指摘されてきた。研究の方向性に賛同したい。具体的には台付甕などの技法や型式的な特徴からは、西三河地域の川原上層式との関係を重視したい。いずれにしても見晴台式と八王子古宮式とはまったく異なる土器様式であり、八王子古宮式のある段階から山中式期までの時間幅をもつ可能性が推測できるものと考えたい。土器様式の基礎単位(範囲)と考える「群の規模」をもつ典型的な様式と思われる、この時期に土器様式が多様で、劇的な変化を遂げつつある時代である点をここであらためて確認しておく必要がある。

7 弥生時代後期を画する動き

視点を变えて、畿内から東海・北陸地域の弥生時代後期前葉を概観してまとめにかえたい。濃尾平野で確認した弥生時代後期の開始を「近江湖南型」の参入期に充てる考え方を、少し広範囲から検証してみたい。まず近畿地域の状況から見て行くことにしたい。まず最も重要視したい遺跡が、摂津の高槻市古曽部芝谷遺跡であり、まとまった近江型甕の出土が報告されている。弥生後期前葉を代表するこの遺跡では器台や甕・鉢にこうした近江湖南型の搬入が読み取れる。さらに畿内様式初頭段階の標識遺跡としての巨摩瓜生堂遺跡沼状遺構上層において、湖南型甕が共伴している点を重視したい。琵琶湖から流れ落ちる淀川水系を中心に、湖南型が拡散していく様子が想定できよう。土器型式からその中心的な時期は八王子古宮式期併行期である点は容易に推察できる。一方で北近畿地域には湖南型の影響はほとんど見られない。また大和盆地においても基本的には同様である。しかし北陸地域では猫橋式を概観すると近江湖南型、あるいはその系列の土器を散見することができる。同様に越前地域には湖南型が散見できるようだ。おおまかではあるが、淀川、東海道(鈴鹿から北勢)、北国道へと拡散のトレースが見られるものと考えられる。この時期(弥生時代後期前葉)、盤状高杯の分布を介して、土器様式の再編化という力強い動きが読み取れるものと考えて

いる。淀川水系から北陸・東海に渡る広範囲に、弥生後期の時代を画する「近江湖南型」の拡散を歴史的な事象として評価したい。これらの詳細は別稿を用意しているので参照されたい。

さて八王子古宮式は急速にその湖南型イメージを失速される。湖南型が色濃く見られる時期は八王子古宮式前半期を中心とする。濃尾平野では急速に湖南色が払拭され、新しい土器様式「山中様式」が生み出される。そこに反映されている型式は、器台や鉢の近江湖南系やワイングラス型高杯などの北近畿系、そしてやや遅れて吉備型高杯の影響を受けた山中型高杯である。西暦1世紀前半の弥生時代後期の扉は、湖南型の波動により始まり、やがて濃尾平野固有の土器様式の誕生をもって、2世紀の弥生後期社会が本格的に動き出して行くものと想定したい。

小稿は「3胎土分析」から「5胎土分析結果からの考察」、表1～表3及図2・3を矢作健二が、その他を赤塚次郎が担当した。また八王子遺跡出土土器との比較研究のために、滋賀県守山市域の資料を快くご提供いただいた伴野幸一氏に記して感謝申し上げたい。また伴野氏からは湖南型甕に関する多くのご教示をいただいた。

引用文献

- 市原 実・吉川周作・亀井節夫・那須孝悌(1988)近畿地方の第四紀層の層序区分。地質学論集, 30, p.111-125。
石田志朗・松田高明・渡辺 農・古谷正和・岡本哲雄(1980)滋賀県南部地域地質図(5万分の1)。建設省近畿地方建設局大戸川調査事務所。
日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)日本の地質6 近畿地方。297p., 共立出版。
緒方正虔(1959)鈴鹿山脈の深成岩類。地球科学, 43, p.1-10。
周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(1982)琵琶湖周辺の花崗岩質岩体。地質学雑誌, 88, p.289-298。
周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(1990)琵琶湖周辺の花崗岩類 - その2。鈴鹿花崗岩体。地球科学, 44, p.184-195。
周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(2000)琵琶湖周辺の花崗岩質岩体 - その5。田上地域の花こう岩類。地球科学, 54, p.380-392。
矢作健二・服部俊之・赤塚次郎(1997)東海地域におけるS字状口縁台付甕の産地について - 胎土分析 による予察 - 。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p.126-127。
吉川周作(1976)大阪層群の火山灰層について。地質学雑誌, 82, p.497-515。